

年を取るにつれ、あちこちと身体の不都合が増える。が、もちろん、治せるものだからあるのだ。

72歳のKさん。いつ頃かはっきりしないが、歩くのが遅くなった。「もっと大きく手を振って。大腿で歩いて」と、奥さんは手厳しい。「この人。なんでも、歳のせいにする。ほら、センセ。この手」と、Kさんの左手を指差す。

膝の上に置いただけなのに、左手の指が震えている。高齢者には、しばしば手の震えがみられる。が、何か動作をしている時はずだ。左腕を曲げ伸ばしすると、動きが歯車のように硬い。表情に乏しいのも気になる。だが、頭のMRI（磁気共鳴画像）には異常はない。パーキンソン病ではなからうか？

パーキンソン病は、ドーパミンを分泌する神経細胞が減るため、身体の動きが不自由になる病気である。何もしていないのに手足が震える。「振戦」、筋肉が硬く強張る「無動」、バランスが悪く、転倒しやすい「姿勢調節障害」が4大兆候である。

50〜60歳代で筋力低下が目立たない時に発病すれば、患者さん自身が異常に気付かず、診断もつきやすい。だが、高齢化社会になって、パーキンソン病の発症年齢も高くなり、70歳前後と延びた。

加齢に伴い、筋力低下が起きる。関節や脊椎、骨粗しょう症に関係して運動器の機能が衰える運動器症候群（ロコモ）の患者さんも増える。筋力低下やロコモとパーキンソン病が合併することもある。となると、専門医でも、症状だけからの鑑別は難しいことがある。

だが、パーキンソン病は、怖い病気ではない。早期から適切なドーパミン補充療法やリハビリを行えば、普通の生活を送れる。Kさんのように、簡単に歳のせいと諦めて、テレビの前でため息をついているだけではもったいない。

（石黒修三「いへろくにニック」・脳神

経外科医： 4/4北國新聞掲載）